へ13
1984
2

2

へ13
1984
2

旧法
2132
133

お類題序

迫沈輕清(おちたるをやりすみ)

ようして鶯も緑の中間(なかま)と

俳諧(はいかい)なる事ハ初(そめ)て見(み)ぬ

ものの美(よ)きまでもと出(でか)類題

よりけるもの出

東京帝国大学

顔題と云

安永二壬辰夏中旬

義示記

むらんのうち

長者新屋(をやぢ)の屋そうり金を

おしみけるほうばかりくしてせらんも

きみしくなりあそびくらゆめ

こもどさがりぶるけたあり

してむらんの滝をたけば合だ

らけるるとゆてイザはうんを

えんだるへ（出て八代誘引紙
ねんぐ元さくあつりにあしだ
すでまはうんとまるるおるにうい
ぬう声をうけくへぐうんといつ
たらしまんん

菊しる恵

とんざ元ねきぐで今度のとむらいを
見さう仏祭ねぐ三十六そう（錆
るぐ十七踊へ（ちんぐ茶屋をいか
ちへうそぐ思ふうさるお大名
うぐぐへ大名ぐ役者の仕をして
たまるねうそ（てどのようる馬ぐ
ぐさへうんるる恵是
ぬを人

ある夜合子あぬんでばうふを
鶴賀八ちゃうひとこそさきまつさかを
きさぬをまれさうのしよあん
たつけて中ゐのあまをらんと
夜よ入てソットゆき戸をたく
きう〳〵せ〳〵と小声でいつの間
ともちろへ大声なのげて

ちろさトいわトト南元さんきまろさ
茨子喰
ちんぐうしのの大ぐひぐ出ざりまて
ちろと喰てんせるおぐ一ごに
二三杯程つくりて喰らぬ新し
て新りますと云サアちんなろくん
せくみうあとふすびを出て茨子ん

てだ〜れば、きんの苦もなくらう
ろう（ゆきまろ）さうるる〜ふ〜ぎと
ちんぎ〜てきけば、落ちぶ
ぎ〜ぶで、きを粉
くさめ
夜ル、明日出ろく海じゃなひハ
海ぐいしゃをたのんで業

もらい給ふくよかぐんきれども
うくちゃ沢いしゃかんぐて見ハ
氣を因（ゆうゑ）せたらよからんと病
人のたをを法まんでうくと
いよ法まく内くうくとうる
づくいたゆたんそうとうと
たるせバクシャアリいしゃどの異（ちが）

ぎやうけ

芝居

ぎやうと奥のく田舎(いなか)もの堺(さかひ)
町(まち)と見まゝくゝ若衆へくり抽
もく市川(いちかわ)といふやつの八幡(やはた)さひ
なり肝(きも)のぬけさま(メアナ)将門(まさかど)
八七人(はちしちにん)さみへ(ゆゆしきメアリ)ふ

ま天(てん)ぐのびらりちぢんぐり赤くろ
ろり白くなりさりいろくまろりふ
ぎやハあんることメアもしへこ
ら白(しら)ぬう大勢(おほぜい)でこの八幡(やはた)
花猪(はなゐのしし)でふひ市川(いちかわ)さいふハいく
らもあります(ハテナ)ヒさやうげ
ぶしかと、おりさ

亀長戯画㊀

次男

とかうもかいなき男ゞ二十りんど
そろるとゝはれば、きつさ者ゆゑ
ゆけくはゝ一番の次男のこゝみ
ちゝんくよでゝはさ取卿ゝゞ乳
こんざゝれ物そろくとゝゞ
一番そろいくくゝれるの次男と

いゝしるこゝ男ゞゞそろくとゝる一番
ざゞそろくとゝる物ゝ風ざろゝ一番次男
いやゝ女のこゝびざ

一奇

物もゝは決ハそ
がらゝなろくゝ物て人
ひゝこゝゝ物ゝ物ゝ

でうろ〳〵ゝ、うんでうせう結の
田のこりやおうしひ百人首で
〳〵ハテ笑ふ、京のうちで
気がつかぬ
見る物聞こと人情けく氣か
ひろひる夜沢山金とひろ
つる美をうんくもめハさうゆめと

て大きな氣をかけ上ひをおひさぶ
うらぶ形るものげけあといでほく
氣ようけ大師の園をとつてこれ
だ日十九兵ハ左右ちんと矢蔵
のこゝろ
ある人書山ゆめとて乃を呼
きこゝろ指をこゝて

そもそものこと過ぎさるとき
はなはだたづねさぶらはんとて遣ひ
をむさんがとやすてはごのうご
いさわがとおもてのこころとも
いつさぶらはもなく遣ひをば
せひてうんどちぐらならば京
もひんしく

あすの朝あさ出立て花見ひ
の遊を誘ひ様はるそぐらかんん
しているを用意ものをうかやん
てあまいはまのあんとこのごあ
きたんひしくというものこそ
して何をしてかの食をこの物を
愛句といの面白をもるこれたそな

なるけものなるべしらくがよろこぶ

はんが

はんがのぢう谷をとりまきむらがりきたりあつまりいりまじりいかるべしらんぞくなるべしおもしろく

なるべしとぞ出して三度

おもしろ

日ごの祝大勝あるべきなるとたりゆる藝ばくしその中に

おもしろも奥まじやう遊びをさらんくなんでもせねば成るを

志ろをまるゆ志ろへあれのけま

ゑり類をあらまし書つくと
いふを聞きおこなべ筆をとれと屋
人の孫ごと

女湯

湯くみをしている亜主の
いしやなづけきんのもりくらの此
さひちゝ切ぬき完とのぞけば

うつくしひ女の大勢丸裸でざつく
ばらとゐて氣のどく風でアノ孫ハ
毎日くのもでござるり〳〵アイサ勢の
ゑゝうゝ夜の砂とわきたてるほど
抜まゆとは出まつて別也て湯り
湯もなくゆか一袋をとれば今
ひねくあけて見ハ地主大丸の彩

大臣

吉亟（由紀）きまりこうの如くに
ぐうくうりはてもくあんとも
おもうべし親兄弟妻子も如
ひまりのくさふわうとさき
なりはりはめりうちんぎう
うち実ら

拘郎

きんでもかでもきぬこいりの
ぐ姫の拘此しさ賢人ハ乳子
仏法ハ歌迦子のでぐるハ支姫
十ケ月の中ハ胎の内でふく
と志りじまんよへ生もきの八十
三ケ月で生れといあうと内を

仏をゞていとこの和ヲ、を用を
まんとおもうと云ふ
火の月
屋敷仕舞まふ赤羽根の火の月
げ日は一ゝ中すあれはまけてを
却もげたらぬ却ナア拵へ(こしらへ)ようて出
来ますさそわるもるこゝ言ナよ北
風よふ南へ(ゝ)を西風ふふ東へ
ぶちゝ(るゝ)たらゝ(ぶ)拵も用ふたく
ぜこけぬすまる智恵(ちゑ)を
おもふくふ貢石で知へさて
それよりこけぬすふとあるべ
(名)鬼(ぎ)を足(ぞく)
初日陽

酒師

毎日〳〵大酒小酒の燗ひもく
いきまいを仕ぶ新酒を双の大
徳利一ぱいも酒てあらば内でハ
女房ぶ不人おあ家のまへもきの
ぶくあるとき紀伊つるぶんとうも
ぶけよ莫妻の燗をなぶり分

一よ大朝ニ投貴て内よ居り鰹
ゑるくと女房大色を酒ぶかり
よ無茶〳〵骨をおるといぶ色ぶ
女房ぶ燗しさまぶ酒のおさう茶
ゆ家ハ海塩茶と吸ものでで
吸ものさ不ぶさんと世房ゆ
色ハ大きよ乙きれまりさ酒の莫

ハかりこと中まゝ沈ゞ見ハゞよ
して詠ぬまゝ
よ世界なぜへ高き所ゝ
おすひできこと
学文
おもしハひごろ学文をまるゝん
ざそれゝハ物くちゝ
人物ゞ高ひ高き廉をうゝごよの
中ハとちら就まるもはゞるゞ
学文まそよそのいんゞあるく
もちゝ高ゝ
妾
殿自の大事よ今法事事事
こゝるいゝゝと祝ゝ

八一家中も殺れ入る虎の勢ひ
殿自よりはじめて彩ひ美服自
八面玲瓏(びやくしん)私ゲ拾りのしさおそ
まさ八出まず一生の彩ひ紛よ
ウ(う)ち敷給よりうきれてやきれませ
自分なるおどおのしがいの色り
の(の)呑こ〻市とおらおづきつめけ

走てやうとたゝ紙ゑゝバはと
の帯小拾そ(泉)ゑるひゝゝゑそも
ゑ切ゝ上ませゝとおヨかゑを
うけるて三テゝまて〻ゑゝハ
いうぬ

めゝり
為(ための)霊ハゑゞ魂(たま)をまけるこよ

くきたけの中やまひでを月をま
ハし鳥かそ人ゲ喰れる月ん
ちう新迦ゲ加ちそるものゲ
それハ天ぢくめくりハひそゲ

きとん

むろの狸ぢ狸ぢ
るちゲとゆぎけ侍ハエ〜ゆとお

もやアゲうくアとよゲ人ものゲ
ゆらゲアく〜きゆるを赤ゆるを
きくとおくうくゲくゲくをくるる
と二合を喰ひ迦ゲ人ゲ赤き
らきて月を(行)を切くと尾
を海うく押(そく)れバ侍ゲうう
へうねて二尺八寸きらとぬく

「使者(きしや)」たゞ細工人(さいく)に入(いり)おまへ
のハ出(でる)

時計(とけい)

ゆるゆるとうんかの出世風でなけく
のける細工人(さいく)時計を拵(こしらへ)あれ
大名(だいみやう)ニさゝゐ(ゐ)ぶ(ぶ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)
日のうら細工のびゝゝゝゝゝゝゝかの

細工人をうんぐ出ゐ(ゐ)れば
「細工人」ゐ(ゐ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ

て出しさ人くく立寄て猶流
さハ沈の坊う赤の坊のうげさ
のう「イヤ淵とうざさ「どうて
ちうてうる「竹薬師
傷ん
髭とうしとのぐさこと
ぐんきちと記げをおぬきいや

ちうすりたまへ「傷ん赤ぬも
親の面ぎりう庭げつくと影者
ぎ「うて立て「傷ん イヤげち
ようあさせる
ぐんぐん
淵のつうひ安良ぐく康むの
ぐあぐきんぐもうりぬけ

うんこんの物をいつともシリセン
名ごりなりひてもこの食ゲすまぬ
ゑ藤こ婚ひてたてられるきもる
ゲめひとく客もゆまりのるホ
金十あちらつ「世良コハ
ぎからひ休ゲ」
夜叉

鬼のられめとをとりあげ
ぶーとうあひ都京を離も
まぬ所ながらひとくソウ同イ
役を知ーと西成見てふ物人も
おちもぎろ「夜叉なり
加川て今夜八百人
鉢鮮出屋

アラ綿ごのちあんでかへる
てゝさんちやといふをきい
て九十六文のかへ四文引の銭
さし出さんとたゞりう
ゑまんだぢう
あゝの夜叉まうる通ま
綿の大ちふを見深あん

家てはゝさまつくごと
はくり小ちよぬゝぶあう
さんの切断ハテノうく火で
ゝけぬ

和尚

小僧が和尚よ何ひ火るまで死ん
ぐハらんとやまぬ和尚火る

で弘んだ小供そのうでをんぐるま
そのまでをんぐるまの
「ゆ」ソレデをれまをんぐるまの又見れうう
今をれいく「和尚をれをるまの死ぞの
見りの「小僧をんぐるまの食で如意を如ひ奥
をくひまの見ハ「和尚ぬうぬうぬうぬで
ひどうふ
をを乃

やうん
第人をあんく今の浮世を
をやをでをるれバいうぬ千家く
をいうもるひ釜をすて茶ハ
んをもんいろく たづねても
入るやうんのあひ和口乃奥や
ぐまうくきてきうそく気を入

代ハいろ紙ざ[illegible]と云へ[illegible]
[illegible]ご金十枚第人あきれくおうそん
ご兼金ごゆくとんざ[illegible]とて
る老人守てうぬらもおろかけ

のの

きのの紙まんとんざとよ
ちらし第離もちうびいそぎ

[illegible]ちかりもるくときていやの
ごゆくへハテきくぬりそれごのぎ量
ハあもをまるうへきいきいきてあよ
へどりでのらはく

大小

あの大小ハちごゼ長く縁くち
たくのざへだりるゆをりの大

の月なかのはつかまでそこぐ
ぢ紙ゝあるゝツシテまゝ二ヶ月大
なるやどりあるゝまゝそよ長
ちんじあぐざ

おきり雀

おきりあぐあの雨をおもひた
しあらゝバ我も雀とりあて

ちゝゝゝ家をすらんとそれ
ゝゝ雀とらまへいろゝちゝふ
しゝたるゆとんで行雨さ
まゝ婦ゝれゝあとをゝひ長
ちゝゝてあらうゝしゝゝと門乃
内に入ゝたのんませゝくゝとゝふ
ゝゝよ雀出てゝて

三丑猿

はんが元服金とうまつ
どのうまの程程しても初色
のきく分もうこきぬ元服程成
きく大声とあげらくこいよ
てもはんが高ぬ歌へあかし
あらひよへくはんがうり徒

きつね
堀川へいろさう幅蛸屋の鳥喰
うり屋ゆの雨喰ゆ廣沢流
きまきのひへちんぐ神ち元服
でのひ西ひとまる西うへ高ひで
どのせく家へたいるとへどかさ
へ松紙ゆ家成

鶯を

ものゝ
ものゝ
ものゝ

ものゝ

ものゝ

うら角まで一合五リンでもこゝぬ
こゝろをひ天ぢくの谷そゝ
鄉子のゝぐこゝ迄いる毛唐人の
天竺毛もうん蕾(うさい)の葉ハ
蓋(くき)ゞやうらう松鶴を外の名和
うりハ又志ほらうしいをかゝるま
こゝる豆ハどゝやしそのゝ家

わるゝこゝ日本の人こゝれハよ人ハ
きハせぬゞゝるもゝりゞこゝそ迄ハゞゝ
しゝてゝハテ有人ハ長ゝゞゝ名
西をゝるゝハテナゞぜゝる人ゞ

大食

ゝんゞゝ大食する人ゞあゝてゝはほ
ゝゝるゝん飯食をとゝり分ゝ十七

ちん酒を二杯小口のこ銅の涙
やきぬ丸喰ちゃやのあさをいる
まいとかすかに貴ある祝のお
をこんを喰て赤らぬ色あまり
ゐを脱ぎふこへ解して
見てれば猿の下ハ鶏の毛
百男

女房南男をきこんでちんの
正真をかりまこへ女房ごと
性ふ百男ハうちわたへ答の
まこふらむ喜をあらり紙見て
見やだいぶだこまるの女房
アイぬ丸人猫ぐ食ぎをなけ
まこうあひまこへ百男返り

らぬ顔で　ニヤウ〳〵（女房）ものごく
かり大きく行をうりて　ぬごい
うぬう〳〵男　後を立てけちらいま
くしひ

おどり子

とこげいしゃ
床芸者を　ぬまさけんを
あくまきを　おぐうひ　ぬちゐんを

ゐるところへ　さな　瀬川　繼ぎ　よむ
まんざ　おハきこと　天人が　猫
瀬の女房ときそ　ゐる　ろうそを
まく　立ぐ　〳〵　おどりこ　口　を
あてくぐ　ぐ　いや　〳〵　リヤア　を
く　〳〵　おどりこ　今　夜　一　度　で　ろ

いしゃ
醫者

はかぼうも商世男ごのそくを
磐ちの山ハ西の海でゑ柄鬼へ
と詞術をてゝ志向をなりとり
けりさやとうくと首のかをを
ごうたひへ黄奴迄せさるへゐの天
物とまりのれ長ひ長をあつて
きとをたけもあひ気よ性し

二十年だりハ日みてもゆるゞ
いしやも石人をたゞらかし三
海坊おきやもゝとたけバ八イ
大板をとく人中での魚にか身ら
上ゆられ丈の紙をこせんとあるの敵
でゝへ毎年をつき出をを出
よハ四国程

欲心

弥も越でも外のことをすておひて金ばかりひろくとるだらうあるとあれば沢ふる金をかるる人が有るを等ていとゞ出れまして言を有ふの事金のをるをいう紙でも金銭ふてめん

うとゞ段々とゞうう金を出して
くれさとでいろ〳〵を能を〳〵を
猶後の百年間て大嘘し金を
まとうて編りは迷ふの人をせ
〳〵物の幕

百廉

なんとたらぬ百の口ゞ二十四文

ぬけてんぐ[illegible]
ぬけさそふ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

金指

大金指の[illegible]ひ男で[illegible]の[illegible]て
[illegible]のよぬり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
大酒大食なる[illegible]の舞[illegible]
[illegible]

今時 指とおり 新申うけ候事

しる 今時 八分の利

情ちう

なんでもかでもいく出しうるハ

ゑうわ富で沙汰の稗ハ米の

稗と遠ひしと出しうる

まども作まうせげあらうさ

稗目ゞ遠うてなるゆゑ八イヤく遠

ともに大きゝ遠ひあれゞ数のせてき

せうと概ねるせくうけくんさ

和ら米食ゝ出遠ひあるまひ

指米食ゝ出ちゞまひ八ニ十

稗も苗世ら

気位

年〳〵心ゑ信ぐ法ひて掛軸掛
まゝ〳〵庫裏より食物
ではなるまんでなる菓物も本食
めいて日〳〵多い事なるよせんを
言ハ二十丈余の巨絶をあし
ら〳〵毎夜〳〵其事あるをなく
のミ海〳〵高浪も大なる出来

高浪も段々高も段々
繁しく月〳〵もの飯

孝子

毎年〳〵子ゞてゞるよ所けく
子のゞ紅ゞ子ゞ毎もゞき
る所まりのゞ子ゞ巨ゞんあら
さるれバ〳〵雑用谷〳〵百度

あるとき人れば夜の美よ

（男子無名初出）

梅酒（きんし）

きくとも初れもはぢきん酒

こゝすくあるさゝ久ひとのゞ梅酒

のきんの字ハ近ひとりの字より八イや

近ひ古ひよりくゝ勤るのゞ

決定（ぐそく）

あるとの表（こゝろ）をきゝてあれハ戸

をゞあのうつなりでこゝる

なりれハ大ぶんとりて家の門

もまちらぐらつてそしてゝ立ち

ゞあしまし

長子（むすこ）

六

親父長子をきんで毎夜く
の客来をひいきもそよ
ひたくしさ今うひハかんど
ぢをとやきみ久ろ紙うりの
ヨびよでをんでを子を毎
くと門口へ出る親父大声
してりんでる子を京を

見てうひじがん
一曲

京をかくよ下女よりを
ばけいろ年もく横町の
抱入よ如房うきのごく吏に
むひやき條でいなりしどもさ
とをはるひをせうい年に

てらのやめるんといろ〳〵ふ
いろんいんぐ　亭主　女房やボ
せうきやまき　女房　なげへ　亭主
ぶつぶつ言く

きもいり

ぐんぐうまるつもきるでる
うれをなるきぶるゆけバ着ぐ

むりうれバいろ〳〵とせめうけ
ても言ぬ新女房げきのどく
内儀とりつだらり〳〵とのミ込
ト二三日の中ハ大きらみと
紡績し〳〵くき角さ今頃ハ
遠ノ糸と糸や新屋げちゃん
くゝゆうきのをもゞうそ糸ひ

まきをに加男うまれんる奥
で風呂敷包にわけたばこ
出して一箱つゝむる時のこの
口紙をうへて色をこゝろんで
ござりまして来ひろうぼん
そうして手数
あり箱屋

侍の箱やの娘の意箱を守り
こんぜ箱屋なる殿の供して
三百里先へゆくよ分て別れ
却てまおくの眼よ付さるの式
くれるといろくのぞむる所
しちん
石箱をこゝろなるまゝくるくと
包んでくれさ所悦んで帰り

原中八角塔（ちうん）を（つい）て弱も吹
も行角よりり（きき）吾れ（われ）を
よまんをいのを東西
ぎるを人の面（うす）るよ者を
ひけくれだ吉ひ火吹行
記事
御子記事一日の形とけ

小判ちうと小粒ちうとがてを
沢ちうも沢山ようづけを
とうん銭を行けくいのるまん
ぎる同塔ちんと吉れバくうん吉
行ちうれまそくと吹ちうアラ
ちがやイサ見へちきれまを
とを合吉れバ（ちび）海老で鯛

ぎんがう神
ぎんぎんとぎんがうかうまつけ
て見ハぎんがう神と名ぐうん
と我吟味のもちまぶよ祝きま
るるとぎんぎんまるれば後
を立てコレぎんがう神これ祭か
ちまちまるかぎんぎんか

まるハ法ぬとちり切じを
ぶ見ハ（ビンボウ神）ぬまりちまり
で家内引越さ

けころ

けころ買てあところより海を
だしまるとおひくたしごゑ
ぬりるけこ声をうけて一節

くゝ「イヤ」は文盛堂をひかるゝ
と御とゝゝもあびる者て二文宣

びくゝ

御まとくゝゝまもいめ「イ」元二三
人都コレくゝるのゝゝあハどおざ
る「アイ」は沢ハかな屋者もかけい
きざゝゝ形みきんもきづけ「コレ」

八よはおびくもまわど乱ゞ
あるゞ御乱ゞゝゝきをひ
おゞ「びくよ」結びてあゞけ
ゞるくくも

嬉出

御川よくしく京ゞ〻老き欲
いゝものゝゝ形みゝんでコレお

ぐんがゝや高の拾びもエが二さ
切りハ法の（一切りハみゝし指
三女ハ高ゲるの（下ぐんきり
目ぐ見て切りゲもうさら

七ゝく神

石乗しくとても蓄ゆるう
一生を安楽ようもそゲよひ

七ゝく神といのもバ金をくるる
といの今かゝは神を祈て金を
もらうんとそれより古キ七福
神のゝけ物を買て祭りバ
ゝしぎや神さちひらる
目沢のきんでよまゝ也今銀が
毎日ゝ黄金二百ゑづさゞ

うんと無理をかけるアラ
ちうやと思ひ付し三百両を
うけれいくと金をつん
で祝ぐを

底

どんぞ底の名人がきて謂り
まさに一歩ずつ

の謂り法度をもとり立底
中幾つけ底地乃底ぐ
翻底ぐんくと謂って暴を
ちんぐさとで今一曲と思む
今度ハ九ッだしごの曲底を
やとて毛ぢらけなる声を
まちぐんくと謂りのぼつ

て九ツ国々見をとりけるこぶち

秋遊（ちやうぶけ）獻

水川へ出て紅葉（もみぢ）を賞

まゝこ年ハ十八歳（らくさい）ひ初

こげな志ゃうがつを見て面

のうちゃうけもるひすいと

いつゝ山世の子ども志らハ

こゝろひ（コヽ井）大男よ乳を

ひるいハむ（むこ）しらの名（ゆいごん）私

ぐ志ゝ場で見てさゝ人

のはゝんのおゝ（ゆ）ちんまりと

ゝつてあるとまゝめよ藤

風まゝりてゝ長ゝ（ながゝ）やむと

三五冬

おがんぐ言葉八助ぐんと
味噌なる八助コハ行ゆとゆ
ゆて屋敷あけもバまいさ角
よるつて五あげ姓とんで
ぐさ言葉

出類頭巾